姫路のキリシタン遺跡の調査研究Ⅲ
姫路の「キリシタン灯籠」

池田武弘*　木原裕　日下部愛子　福西章

姫路日ノ本短期大学　播磨キリスト教文化研究センター

〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 890 番地

Study on Secret Christian Remains at Himeji Ⅲ

【はじめに】

姫路地域ではキリシタン遺跡が少ないと思われ、姫路地域の本格的なキリシタン遺跡の調査や研究は進んでいない。そこで本学では 2014（平成 26）年度姫路市政策研究助成事業に応募し、研究テーマを「黒田官兵衛の足跡と姫路地域のキリシタン遺跡の調査及び観光マップ制作」と設定して研究を始めた[1]。この政策研究は学生が提言を行うことを目的としていたので学生主体で進められた。その後 2016（平成 27）年度から、播磨キリスト教研究センターでキリシタン遺跡の調査研究を継続して行うことにした[2,3]。

キリシタン遺跡は全国的にみると江戸時代に造られたものが多いので播磨地方の絵図(図１)をもとに揖東郡、飾西郡、飾東郡、神西郡、神東郡を対象に街道付近の調査を実施した。現在の姫路市網干区新在家、姫路市新在家本町、姫路市本町、姫路市香寺町、姫路市山田町、姫路市豊富町にあたる地域を対象とした。

図 1. 播磨の國細見圖

播磨の國絵図は慶長時代のものがあるが、所蔵している姫路市が表記に問題があるとして公開していないため、本学所蔵の寛延 2 年の絵圖を用いることにした。

調査研究にあたり、先行して研究の進んでいる加西市の石造文化

＊姫路日ノ本短期大学　特任教授

研究会の助言を得て進めた。

加西では「姫路城改築中の慶長 5 年から 14 年までに加西で造立された石仏は発見不能」[4]で、その後造られたキリシタン的な石造が約 800 体あり、姫路のキリシタンが加西方面に逃れたと考えられており、姫路市内にはキリシタンの遺跡はほとんど見当たらないと思われていた。しかし、今までの調査で姫路市新在家本町の観音寺、山田町牧野の墓地、豊富町神谷の墓地、太尾の墓地、香寺町八葉寺の墓地を調査し、「背面十字架地蔵」を観音寺、豊富町細野墓地、船津町、網干区新在家善慶寺で確認することが出来た。また「南無阿弥ゼツ仏」と刻まれた墓石を網干の善慶寺、観音寺、八徳山八葉寺で発見することができた。そして「同會」に十字架を刻んだ墓石は各墓地に存在していた。特に観音寺の「南無阿弥ゼツ仏」と刻んである台座に「上人」とのあるのには衝撃的な発見であった。また「いかり肩地蔵」や、キリスト教の父（神）と子（イエス・キリスト）と聖霊の「三位一体」をあらわす錫杖を持った地蔵を発見できたことも、驚くべき発見であった。この成果については姫路市大学発まちづくり研究助成事業の助成を受けて行ったので、詳細は姫路市まちづくり助成事業の研究成果発表会で発表している[2, 3]。

本年度はこれまでに背面十字架地蔵や墓石を中心に調査研究を行ってきたので、キリシタン灯籠について調査研究をすることにした。

(1) キリシタン灯籠について

灯籠は屋外用の照明具であり、風から守るために火炎部を囲む構造（火袋）をもつ。原型は中国大陸から朝鮮半島を経て仏教とともに伝来した。灯籠を構成する基本的な部材(図 2)は、下から基礎、中台、火袋、傘、の 6 部材である。神仏に燈明を献ずるためや交通の照明としてのほか、庭園内では鑑賞のための庭灯籠が置かれた。庭灯籠には利休形、遠州形、織部形などがある [5]。

安土桃山時代になると茶の湯がさかんになり、路地のあかりとして石灯籠が利用されるようになり、茶人好みのものが創作されるようになった。代表的なものとして織部形石灯籠（図 3）がある。武将で茶人の古田織部正重然（おりべのかみしげなり）が考案したと言われている。特徴は四角柱の竿石の下部の基礎（台座）部分はなく、高さが調節できるように、地面に直接埋め込んで設置するようになっている。

図 2. 燈籠の部材

この織部形石灯籠はキリシタン灯籠ともいわれている。その理由は形状にある。竿石が十字架の縦を表し竿石の上部はふくらんで円形部が横を表して、デフォルメされた十字架であると言われている。そして竿のくぼみには人の形が彫られており、その人物像はマリア像ともイエス・キリスト像とも言われ、聖人像と主張する見解もあり、統一した解釈はなされていない。
また、江戸初期までに造られたキリシタン灯籠は竿の上部に一見しただけでは意味の分からない組み合わせ文字が刻まれたものもある。

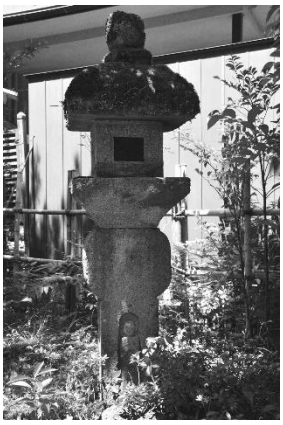

図 3. 織部形石灯籠

(2) 姫路市内のキリシタン灯籠

現時点では姫路市内のキリシタン灯籠は数少ないが現在次の箇所で見ることができる。

1. 善慶寺（網干区新在家）
2. 姫路城西ノ丸広場
3. 好古園（姫路市本町）
4. 常福寺（香寺町須加院）

1. 善慶寺のキリシタン灯籠

網干区新在家にある善慶寺（浄土宗西山禅林寺派）（図 4）は、姫路市教育委員会が「明応元年（1492 年）勧空善慶上人の開基と伝え、八世山空和尚を中興開基とする。山空和尚の記し正徳二年（1712 年）「善慶寺本尊縁起」に、揖東郡宮脇（現龍野市）にあった古仏を修理して入仏供養儀式を行ったことがみえる。…」と説明している。そしてこの境内にキリシタン灯籠（図 5）があることにも触れている。このキリシタン灯籠の年代は江戸中期のものと思われる。理由は下記のとおりである。

図 4.善慶寺正門と教育委員会案内板

① 文字が刻まれていないことと火袋がないこと。

キリシタン灯籠には文字が刻まれたものとそうでないものがあり、全国で発見されているキリシタン灯籠の分類から、江戸初期までに作られたものは文字が刻まれ、中期からは文字が刻まれていない灯籠であるとされている。またキリシタン灯籠は、初期形には火袋があるが、「長年の間になると傘石、火袋石は失われ、竿石のみが残っている」[6]と云われ

図 5. キリシタン灯籠

ている。以上二つ理由から、善慶寺にあるキリシタン灯籠は、江戸初期のものとはいえない。

境内にある背面十字架地蔵（図 6）は一文字十字架である。背面十字架地蔵菩薩の背面の変遷については加西市異形石仏研究会が出版した文献４に詳しく述べられている[4]。加西市の吉田冠次らは、加西市で立像された約 1000 体の背面十字架地蔵とその類型を調査し、像立年代順に並べて発表している。この分類によると横一文字の背面十字架地蔵は延享（1774 が元年）時代以後となっている。したがってこの分類に当てはめると善慶寺の背面十字架地蔵は江戸中期以後のものであるといえる。

図 6 背面十字架地蔵

この寺の縁起からも江戸時代に現在の境内の姿が整えられたと思われること、一連のキリシタン遺跡が江戸中期以後のものであるところから、このキリシタン灯籠も江戸中期に造られたものと思われる。

2. 姫路城のキリシタン灯籠

姫路城西の丸広場にキリシタン灯籠がある（図 7, 8, 9）。この灯籠については姫路城のパンフレット等には掲載されていない。しかし、この灯籠はその外形からキリシタン灯籠であるといえる。このキリシタン灯籠は火袋があり、竿の部分に文字が刻まれていることから江戸初期までに造られた灯籠ということが出来る。

竿の上部に書かれている文字についてはさまざまな説がある。

① 松田重雄氏は「切支丹の信仰」[7]の中で文字列を左に 90 度回転させると Lhq で L は小文字にすると i で, 横にした h は T で Q に見える文字は p であるとし、ヘブライ語は右読みであるからこの文字を pti と判読し、ヘブライ語は母音抜きであるから patri パートリー（父なる神）であり像はイエスキリストであるとしている。

② この見解に対し、ここに刻まれた文字は、松田氏と同じようにこの文字を 90 度横にしたフェニキア文字であるとの説もある。

図 7. 切支丹灯篭正面

またLhqすなわちqhlであるとの説やギリシャ文字であるとの説もネット上にある。

③　一方、澤田天瑞氏は、「謡曲『熊野（やゆ）』と織部灯籠の構想について」[8]の中で、書かれた文字は、北斗信仰を表す「辰」の文字であり、キリシタン灯籠であることを主張する多くの研究者が、『辰』の文字を分解し（中略）、ＩＨＳ説、すなわちJesus Hominum Salvator(耶蘇は人間の救済者なり)であり、したがって立像は「マリヤ像」または「宣教師像」と称しているのは、あまりにもキリスト教へのこじつけであると反論した。そして、結語で「織部灯籠は古来よりの辻灯籠を規範とし、謡曲『熊野』に基づき、主題を『現世利益』構想は『北斗（妙見）信仰』、構成は『辻灯篭』で除災招福を祈願して据えられた露地灯籠であると考察する」とキリスト教的な見方を否定した。

図8右側

図9左側

3.好古園のキリシタン灯篭

姫路城の西側に好古園がある。好古園には西御屋敷跡、武家屋敷跡、通路跡などの地割をいかして平成4年（1992年）九つの庭園が造られた。

その中の夏木の庭にキリシタン灯籠(図 10,11,12,13)が置かれている。この灯籠は地割を活かして造られているので、以前からあったものか、あるいは造園時にどこかから移設されたのか分からない。しかし、火袋があり竿の上部に文字（図13）が刻まれているところから見ると明らかに慶長時代から江戸初期に造られたものであるといえる。ここに刻まれている文字も他の地域でも見ることが出来る典型的な文字である。なお、好古園にはこのほか加西市で発見されているキリシタン灯籠と同じような灯籠もあるが、現時

図10キリシタン灯籠

図11正面右側

点ではキリシタン灯籠といえるかどうかは判らない。

4. 常福寺のキリシタン灯籠

香寺町須賀院にある常福寺（黄檗宗）は、平安時代に立てられたお寺を江戸時代に再興したといわれている。キリシタン灯籠(図 14)があり、香寺町が姫路市に合併する以前に香寺町教育委員会がキリシタン灯籠として確認している。灯籠は、常福寺境内の庭園内にあるが、現在常駐の住職が不在で閉じられたままで、境内に入ることは出来ないが、姫路市教育委員会の HP 上に写真が掲載されている。その写真から見ると火袋はあるので初期キリシタン灯籠のものと思われるが、竿に文字が刻まれていないように見える。今後確認作業が必要である。

図 12

図 13

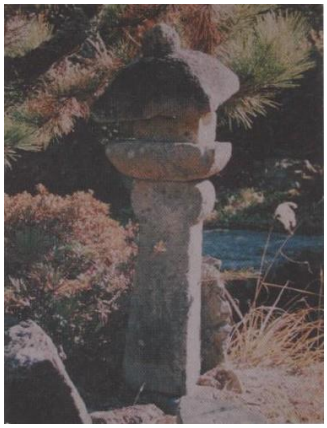

図 14　キリシタン灯籠
現在境内に入ることが出来ないため HR の写真を借用した。

【おわりに】

今回はキリシタン灯籠を調査したが、この発案者が古田織部であり、彼はキリシタンではなかったため、織部灯籠はキリシタン灯籠とはいえないという説もある。しかし、千利休がキリシタン文化に触れ侘び茶を大成したように古田織部もキリシタンとの親交もあり、キリシタン文化の影響を受けてこのような灯籠を造り出したと考えることが出来る。

この灯籠はキリシタンにとっては仮託礼拝物として用いることが出来たであろう。そのために全国的にキリシタン灯籠として広まったと考えられる。後に網干の善慶寺にあるような、変形したといわれる火袋の無い灯籠が出てきたことが、そのことを物語っている。キリシタンにとっては、火袋はあっても無くても礼拝物としては関係がない部材であったにちがいない。一方古田織部は茶庭に用いる灯篭として発案したため茶庭におく灯火物として台石が無いため埋め込みで高さが調節できることと古田織部が有名な茶人であったことから茶庭にふさわしい灯籠として普及したことも考えられる。その意

味では初期の織部形灯籠は茶庭に備えられた灯籠とキリシタンの礼拝物としての灯籠に分化したと考えるのが妥当ではないかと思える。

参考文献

[1]日下部愛子,木原裕,池田武弘,浜田敏子,岡田教三,松本恭子（2015）キリシタン官兵衛と姫路地域のキリシタン遺跡発掘，姫路日ノ本短期大学研究紀要，第 37 号，65-79.

[2]池田武弘,福西章,日下部愛子,木原裕（2017）姫路のキリシタン遺跡の調査研究，姫路日ノ本短期大学研究紀要，第 39 号，37-49.

[3]池田武弘,木原裕,日下部愛子,福西章(2018)姫路のキリシタン遺跡の調査研究 II，姫路日ノ本短期大学研究紀要，第 40 号，107-119.

[4] 加西異形石仏研究会（2005）加西の異形石仏、 加西異形石仏研究会..

[5] 世界大百科事典・日本大百科全書より抜粋.

[6] 伊達市教育委員会（1969）伊達市善光寺境内の織部灯籠説明板より.

[7] 松田重雄 （1976)「切支丹燈籠の信仰」,恒文社.

[8] 澤田天端（2004）庭園の研究に関する研究 No.23. 謡曲「熊野」と織部灯籠の構想について，日本庭園学会誌，2004(12),19-34.